

『枕草子』の「すさまじ」の位置

土屋博映

1 はじめに

『枕草子』の美的理念語に関する研究は数多くなされている。本稿筆者も、「をかし」とその周辺の語についていくつかの拙稿をまとめた⁽²⁾。てきた。

しかし、最近、美を表現する言葉を追求するだけで、はたして『枕草子』の本質、清少納言の人間像にまで真実、せまれるものであるうかという疑問を抱くようになってきた。その疑問を、実は「『枕草子』の「にくし」の価値」と題して、論文にまとめあげたばかりである。ここにその論文（以下、「前記論文」とする）での筆者の考えを引用しておくことにする。

美を表現する言葉というものは、醜を表現する言葉、もしくは概念があつてはじめて、美を美とし、醜を醜として認めることができるわけであつて、もしもこの世の中に「美」しか存在しない

なら、「美」と表現する必然性もないということになる。

つまり、『枕草子』の美的理論語を追求し、検討しようとするならば、醜を表現する言葉、嫌悪表現語についても同様の過程を経なければならぬと思うのである。

実際、『枕草子』の「もの型章段」には、美的理念語に対し、対等の立場で、嫌悪表現語が、主題として提示されているのである。

既に前記論文に記したことであるが、嫌悪表現語が主題として提示されている「もの型章段」を、日本古典文学大系の本文の順序に従い並べ、その分量を行数で示してみたものを、ここに再掲し、確認しておきたい。

すさまじきもの (57) たゆまるるもの (2) 人にあなづらるもの (2) にくきもの (53) にげなきもの (13) おぼつかなきもの (3) ねたきもの (24) かたはらいたきもの (9) あさましきもの (10) くちをしきもの (9) 見ぐるしきもの (10) いひにくきもの (4) わびしげに見ゆるもの (6) 暑げなるも

- の (3) はづかしきもの (20) むとくなるもの (15) はしたなきもの (7) つれづれなるもの (2) とり所なきもの (5) おそろしげなるもの (2) いやしげなるもの (4) 胸つぶるもの (8) 名おそろしきもの (6) むつかしげなるもの (6) くるしげなるもの (6) 心もとなきもの (26) たのもしげなきもの (4) したり顔なるもの (8) さわがしきもの (6) ないがしろなるもの (2) ことばなめげなるもの (2) さかしきもの (11) いみじうきたなきもの (2) せめておそろしきもの (3) うちとくまじきもの (2)

以上三十五の嫌悪表現語が主題として提示されているわけで、さらに分量が多いもの十段を並べると次のようになる。

- 1 すさまじきもの (57)
- 2 にくきもの (53)
- 3 心もとなきもの (26)
- 4 ねたきもの (24)
- 5 はづかしきもの (20)
- 6 むとくなるもの (15)
- 7 にげなきもの (13)
- 8 さかしきもの (11)
- 9 あさましきもの (10)
- 10 見ぐるしきもの (10)

以上十段が、嫌悪表現語の段として、十行以上の分量をもつ。前記

論文でも述べたことであるが、これらは作者がより興味をひかれた段であり、より嫌悪表現語として重要なものだと意識していた段ということができよう。

これらがどのように用いられているかを追求することが、『枕草子』の本質にせまる上で重要であることは言うまでもないことである。そこで、前記論文で、「にくし」について検討したわけであるが、本稿では、「もの型章段」としては、分量上「にくきもの」を上まわっていた「すさまじきもの」に焦点をしぼり、「すさまじ」の位置について考え、さらに『枕草子』の本質にせまってみたいと思う。

2 「すさまじきもの」の対象

ここでは、「二五段 すさまじきもの」という「すさまじ」を主題とした段について検討を加える。本段で、作者はどのようなものを対象としているかを考えてみる。

- (1) 人間
 - 牛が死んだ牛飼
 - 赤ん坊が亡くなった産屋
 - 博士が続いて女の子を生ませたこと
 - 方違えでごちそうをしないこと
 - 人の国からの手紙に何もないこと
 - 手紙の返事が物忌で来ないこと
 - 必ず来るはずの人が来ないこと

- 婿がやってこなくなる事
 - 子供の乳母がもどってこない事
 - 待つ男と別の男が訪ねて来た事
 - 験者が物怪を追いはず眠った事
 - 除目に司を得られなかった人
 - 上手に詠んだ和歌の返歌がない事
 - 時代遅れの人が時流にのっている人に、つまらない和歌をおくつた事
 - 晴れの場合に用いる扇に、思いもしない絵が描かれてしまった事
 - 産養や別れの使にほうびを与えない事
 - 結婚して四五年子供がうまれない事
 - 子供の親が昼寝をしている事
 - (2) その他
 - 昼ほえる犬
 - 春の網代
 - 三四月の紅梅の衣
 - 火をおこさない炭櫃や地火爐
 - 十二月の末の長雨
- 一見して明らかなくとく、「すさまじきもの」の項目は、圧倒的に人間に対してである。つまり、「すさまじきもの」と判断する対象は人間が多いということなのである。
- この、対象に人間が多いということは、前記論文の「にくし」と同

様である。ただし、その対象を比べてみると相当な違いがあるように思われる。

参考までに「にくし」の対象となるものを、人間を中心にあげておこう。

- 急ぐ時の長話の客
- 眠り声の験者
- 何でもない人が笑顔で話すこと
- 火で手足をあぶる者
- 酒ぐせの悪い人
- 人をうらやみ、わが身を嘆き、おしゃべりする人
- 何か聞こうとすると泣く兎
- 隠しておいた人がいびきをかくこと
- 忍んで来た人が音をたてること
- 不快な音のする車で乗りまわる人
- でしゃばる人
- 礼儀をわきまえない子供
- 主人の気持のわからない下女
- 新参者のでしゃばり
- 昔の女をほめる男
- くしゃみをしてまじないを言う人
- 戸をしめない人

3 すさまじきもの

「すさまじきもの」という段の内容について検討を加えてみよう。
まず冒頭の部分からである。

(1) ⁽⁵⁾すさまじきもの 昼ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅の衣。
牛死にたる牛飼。ちご亡くなりたる産屋。火おこさぬ炭櫃、地火
爐。

まず「昼ほゆる犬」であるが、これは、犬は夜ほえるものであるという前提、言いかえれば、基準、というものがあって成立する表現である。

以下、各項目を続けて見ると、「網代」は冬のもの、「紅梅」は十一月から二月頃までのもの、「牛飼」の牛がいないこと、「産屋」に「ちご」がいないこと、「炭櫃」や「地火爐」に火をおこさないこと、などと、いずれも前提となる基準にはずれたものが「すさまじきもの」の項目となっているのである。

古典文学大系の頭注には、次のように記されている。

「すさまじ」は対象が基準となるものに調和せず不安定な感じを与え、そこから不快な感情が導かれる状態で、ものすごい意はない。

「対象が基準となるものに調和せず」という点については、まさにその通りである。

以下、本文の順に従って、項目の検討を続けていくことにする。

(2) 博士のうちつづき女子生ませたる。

これは、「博士」が世襲であるのに対し、「女子」にはそれをうけつぐ資格がないのでこう表現したものと言われている。

「博士」という言葉には悪いイメージがないのが普通である。また「うちつづき女子生ませたる」がとくに悪いということでもない。「うちつづき女子生ませたる」が悪いと言うのなら、それは単に、主観的な不快感を示すだけで、客観的な判断の基準があるわけではない、つまり、

博士↓男が世襲↓女子↓すさまじ

という「男が世襲」という客観的な基準が入るところが「すさまじ」の「すさまじ」たる所以という風に考えてはどうだろうか。

(3) 方たがへにいきたるに、あるじせぬ所。

まいて節分などはいとすさまじ。

これは、「方たがへ」に行けば、当然ごちそうをするものだという前提、基準で言っているのである。さらに、「節分」などはそれが言うまでもないことなので「いとすさまじ」と、レベルアップした表現が使われているのであろう。

これも、「あるじせぬ所」とあるだけでは、単なる不快感にすぎない。それに「方たがへ」「節分」などという基準が加わって、はじめて(2)と同じく「すさまじ」らしさがうまれてくるのだということになると思われる。

(4) 人の国よりおこせたるふみの物なき。京のをもさこそ思ふらめ、

されどそれはゆかしきことどもを書きあつめ、世にある事などもきけばいとよし。

これは、「人の国よりおこせたるふみ」ならば、「物」があるはずだという前提で言っているのである。

これも、「物なき」だけでは単なる不快感にすぎない。そこに「人の国よりおこせたるふみ」という前提をもちだすことによって「すさまじ」を表現しているのである。

(5) 人のもとにわざときよげに、書きてやりつるふみの返りごと、いまはもてきぬらんかし、あやしうおそき、とまつほどに、ありつる文、立文をもむすびたるをも、いときたなげにとりなしふくだめて、上にひきたりつる墨などきえて、「おはしまさざりけり」もしは、「御物忌とてとりいれず」といひてもて帰りたる、いとわびしくすさまじ。

また、かならず来べき人のもとに車をやりてまつに、来る音すれば、さななりと人々いでて見るに、車宿にさらにひき入れて、轅ほうとうちおろすと、「いかにぞ」と問へば、「けふはほかへおはしますとてわたり給はず」などうちいひて、牛のかぎりひきいでて往ぬる。

これは二つの項目について記されているが、類似した内容なので、まとめてとりあげた。

前者の「ふみ」の場合、「人のもとにわざときよげに、書きてやりつる」がポイントである。「わざときよげに」書いてやったのだから、当然

返事が来るはずだという作者の前提がある。だから、「おはしまさざりけり」では「すさまじ」そのものだし、「御物忌とてとりいれず」ならば「いとわびしくすさまじ」ということになるのである。

本例では「すさまじ」が「わびし」と関連をもつことに注目しておきたい。

後者は、「かならず来べき人」が来ないのである。これは「べし」がポイントである。人が今日来るはずの前提、期待感、それがまったく裏切られたことを「すさまじ」としてとらえているのである。

二例ともに「すさまじ」が感情的に用いられるともとれるが、どちらも、単に、「返りごと」がなかったり、やってこなかったりではなく、それが当然あるはずだという前提、期待感が存在するところが「すさまじ」の特徴であると言えよう。

(6) また家のうちなる男君の来ずなりぬる、いとすさまじ。さるべき人の宮つかへするがりやりて、はづかしとおもひるたるもいとあいなし。

ちこの乳母の、ただあからさまにとていでぬるほど、とかくなくさめて、「とく来」といひやりたるに、「今宵はえまあるまじ」とて返しおこせたるは、すさまじきのみならず、いとにくくわりなし。

女むかふる男、まいていかならん。まつ人ある所に、夜すこしふけて、忍びやかに門たたけば、むねすこしつづれて、人いだして問はするに、あらぬよしなき者の名のりしてきたるも、返す返

すもすさまじといふはおろかなり。

これは、(一)「家のうちなる男君の来ずなりぬる」、(二)「ちごの乳母がすぐにもどらないこと」、(三)「女むかふる男」の三つの項目を含んでいる。

(一)の「家のうちなる男君」は、当然来べきもの、(二)の「ちごの乳母」は、当然「ちご」の世話をすべきもの、(三)の「女むかふる男」は、当然来るはずの男が来ずに、「あらぬよしなき者」が訪れたという、いずれも、前提となる期待がはずれたという点で共通する。

(一)からは「すさまじ」と「あいなし」の関連性、(二)からは「すさまじ」よりも感情の度合の強いものが「いとにくわりなし」であることがわかる。「あからさまに」という前提を破ったので、「いとにくわりなし」と、「すさまじ」からレベルアップしたのである。

また(三)は、男が来ないのみならず、「あらぬよしなき者」が訪れたことにより、「すさまじ」よりも感情の度合が強くなったと考えられる。

(9) 験者の物のけ調ずとて、いみじうしたりがほに独銚や数珠などもたせ、せみの声しほりいだして誦みゐたれど、いささかさりげもなく、護法もつかねば、あつまりゐ念じたるに、男も女もあやしとおもふに、時のかはるまで誦みこうじて、「さらにつかず。立ちね」とて、数珠とり返して、「あな、いと験なしや」とうちいひて、額よりかみざまにさくりあげ、あくびおのれうちしてよりふしぬる。いみじうねぶたしとおもふに、いとしもおほえぬ人の、おしおこしてせめて物いふこそいみじうすさまじけれ。

これは、「験者の物のけ調ず」という本来すべき仕事に対し、それをたさず「あくびおのれうちしてよりふしぬる」ことがのべられている。「物の怪」を「調ず」べき前提をまもらないことが「すさまじ」なのである。

ところで、前記論文では「にくし」をとりあげたこと、既に述べたが、「にくきもの」に、この(9)とごく類似した部分があるので、とりあげておく。

(10) 俄かにわづらふ人のあるに、験者もとむるに、例ある所にはなくて、ほかに尋ねありくほど、いと待ちどほに久しきに、からうじてまちつけて、よろこびながら加持せさするに、この頃ものけにあづかりて、困じにけるにや、あるままにすなはちねぶりごゑなる、いとにくし。

(二八段・にくきもの)

これについて、前記論文では次のようにまとめたのである。一部改変して再掲する。

(10)も(9)も験者としての役割をはたさないことに対して「すさまじ」また「にくし」と判断している点が変わりて類似している。(10)の「にくきもの」では「あるがままにすなはちねぶりごゑなる」ことに対し「にくし」と、(9)の「すさまじきもの」では、「あくびおのれうちしてよりふしぬる」であることに対し、「すさまじ」と判断している。

いずれも自分の「験者」としての職分をはたしめせずに眠くなっ

てしまった態度を「にくし」「すさまじ」でとらえているのだが、ではこれがまったく同一であるかというところも言えない。

(10)は「俄かにわづらふ人」があつて、「験者」をさがしまわつたあげく、「いと待ちどほに久しきに、からうじてまちつけて」いた状態である。事は急を要していたのに「験者」が役にたたなかつたことを「にくし」と判断しているのに対し、(9)は「験者の物のけ調ず」という場面で、「男も女もあやし」と思っていると、結局役にたたなかつたのであり、それを「すさまじ」と判断しているのである。

この二例からだけで言えば、「にくし」は感情的かつ主観的であり、「すさまじ」は冷静かつ客観的であるという相違があると言えよう。

右のようにまとめたのであるが、(9)では験者が「物のけ調ず」ことを放棄したのに対し、(10)では放棄したわけではなく「ねぶりごゑなる」ことを「にくし」と判断したのである。基準・前提をいったものがなく、不快感であることが「にくし」の特徴と言えよう。

(11) 除目に司得ぬ人の家。今年、はかならずと聞きて、はやうありし者どものほかほかなりつる、田舎だちたる所に住むものどもなど、みなあつまりきて、出で入る車の轆もひまなく見え、物まうでする供に、我も我もとまゐりつかうまつり、ものくひ、酒のみ、ののしりあへるに、はつる暁まで門たたく音もせず、あやしうなど耳立ててきけば、前駆おふこゑごゑなどして、上達部などみな出

で給ひぬ。ものききに、宵よりさむがりわななきをりける下衆男、いと物うげにあゆみくるを、見る者どもはえ問ひにだにも問はず。外よりきたる者などぞ、「殿はなににかならせ給ひたる」などとふに、いらへには、「なにの前司にこそは」などぞかならずいらふる。まことにたのみけるものは、いとなげかしくおもへり。つとめてになりて、ひまなくをりつる者ども、ひとりふたりすべいでて往ぬ。ふるき者ども、さもえいきはなるまじきは、来年の国々、手を折りてうちかぞへなどして、ゆるぎありきたるも、いとほしう、すさまじげなり。

これは「除目に司得ぬ人の家」の項目である。「すさまじきもの」一段中、もっとも長文である。

ここでは、初めの「今年はかならず」に注目したい。「かならず」国司になるはずという前提、期待感がもののみごとにはずれてしまつたために「いとほしうすさまじげなり」となつた。「いとほし」は「すさまじ」との関連語である。

(12) よろしうよみたとおもふ歌を人のもとにやりたるに、返しせぬ。懸想人はいかがせん、それだにをりをかしうなどある返事せぬは、心おとりす。

またさわがしう時めきたる所に、うちふるめきたる人の、おのがつれづれといとまおほかるならひに、むかしおぼえてことなることなき歌よみておこせたる。

これは二項目で、ともに和歌の内容である。

前者は、「よろしうよみたとおもふ歌を人のもとにやりたるに、返しせぬ」ことである。これは(5)の「人のもとにわざときよげに書きてやりつるふみ」と同類の内容である。単に「返しせぬ」ではなくて「よろしうよみたとおもふ歌」であるところに「すさまじ」が用いられるわけである。

なお、「すさまじ」は「をかし」の対義語でありかつ「心おとりす」の関連語であることに注目しておきたい。

後者は、「うちふるめきたる人」、つまり、時流におくれた人が、「時めきたる所」、つまり、時流にのっている人のところにつまらない歌をよこしたという内容。これは非常に不快感に近い例である。

(13) 物のをりの扇、いみじとおもひて、心ありと知りたる人にとらせたるに、その日になりて、思はずなる絵などかきて得たる。

これは「物のをりの扇」に、「思はずなる絵」が描いてあったのが「すさまじ」なのである。「思はずなる」、つまり期待外という点に「すさまじ」の特徴が言い尽くされているのである。

(14) 産養、むまのはなむけなどの使に、禄とらせぬ。はかなき薬玉・卵槌などもてありく者などにも、なほかならずとらすべし。思ひかけぬことに得たるをば、いとかひありとおもふべし。これはかならずさるべき使と思ひ、心ときめきしていきたるは、ことにすさまじきぞかし。

これは「禄とらせぬ」ことについてのべた項目である。(3)の「方たがへにいきたるに、あるじせぬ所」とよく似ている。

注目すべきは、最後の「これはかなならずさるべき使と思ひ、心ときめきしていきたるは、ことにすさまじきぞかし」というまとめの一文である。「かならず」と「さるべき」、そして「心ときめき」がポイントである。「かならず」「さるべき」という前提から、「心ときめき」という期待感がおこり、それが破られたときに「すさまじ」と判断しているのである。

(15) 婿取りして四五年まで産屋のさわぎせぬ所も、いとすさまじ。これは、「婿取り」して、「産屋のさわぎせぬ所」について「すさまじ」と言っている。「婿取り」をすれば子供がうまれるのは当然だという前提からの判断である。

(16) おとななる子どもあまた、ようせずは、孫などもはひありきぬべき人の親どち昼寝したる。かたはらなる子どもの心地にも、親の昼寝したるほどよりは、より所なくすさまじうぞあるかし。寝おきてあぶる湯は、はらだたしうさへぞおほゆる。

これは親が昼寝をしていることに対し、「より所なくすさまじ」と言っている。「より所なし」が「すさまじ」と関連することがわかる。また「寝おきてあぶる湯は、はらだたしうさへぞおほゆる」から、「すさまじ」を強めた場合、つまり感情の度合が強くなると「はらだたし」となることが知られる。

(17) 十二月のつごもりのながあめ。「一月ばかりの精進解齋」とやいふらん。

これは「十二月のつごもりのながあめ」が「すさまじ」であると言

う。この項目、諸本に出入が多く、はっきりしない。

以上が「すさまじきもの」という段の全文の検討である。嫌悪表現語の「もの型章段」の中では、文の量が最大なのが本段であった。

ところが実は「すさまじ」の用例は本段以外では非常に少ないのである。「すさまじ」は作者にとつて重要な嫌悪表現語であったが、その前提、基準の存在という構造が対象を限つたため、そんな結果になつたと思われる。

3 「すさまじきもの」以外の用例

ここでは「すさまじきもの」という段以外の「すさまじ」の用例を見ることにする。

- (18) なほ此の事に宿世なき日なめりと屈して、「いまはいかで、さなん行きたりしとだに、人におほく聞かせじ」などわらふ。「いまもなどか、その行きたりしかぎりの人どもにていはざらむ。されど、させじと思ふにこそ」と、ものしげなるも、いとをかし。されど、「いまはすさまじうなりにて侍るなり」と申す。「すさまじかべきことかは」などのたまはせしかど、さてやみにき。

(九九段 五月の御曹司のほど)

この「すさまじ」二例は、いずれも会話文で、初めのが清少納言、後のはそれをうけて中宮が言ったものである。したがってどちらも、清少納言が返歌をするのに遅れてしまったことについて用いられていることになる。「すさまじきもの」の段で用いられたのは異なり、

かなり主観的であり、不快感に近いものと考えられよう。

- (19) 「歌はいかが。それ聞かむ」とのたまへば、「いま、御前に御覽せさせて後こそ」などいふ程に、「雨まことに降りぬ。などか、こと御門々々のやうにもあらず、この土御門しも、かう上もなくしそめけんと、けふこそいとにくけれ」などいひて、「いかで帰らんとすらん。こなたさまは、ただおくれじと思ひつるに、人目も知らず走られつるを、奥行かんことこそ、いとすさまじけれ」とのたまへば、「いざ給へかし。内裏へ」といふ。

(九九段 五月の御曹司のほど)

この「すさまじ」が用いられているのは、侍従殿藤原公信の会話部分である。「奥行かん」ことこそが「すさまじ」だといふのであるが、これも前提や基準があるわけでもなく、単なる不快感に近いと言えよう。

- (20) 梨の花、よにすさまじきものにして、ちかうもてなさず、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔などを見ては、たとひにいふも、げに、葉の色よりはじめて、あいなくみゆるを、もろこしには限りなきものにて、ふみにも作る、なほさりともしやうあらんと、せめて見れば、花びらのはしに、をかしき匂ひこそ心もとなうつきためれ。楊貴妃の帝の御使にあひて泣きける顔に似せて、「梨花一枝、春、雨を帯びたり」などいひたるは、おぼろげならじとおもふに、なほいみじうめでたきことは、たぐひあらじとおぼえたり。

「木の花は」という「は型章段」の一項目、「梨の花」について「すさまじ」が用いられている例である。この「すさまじ」も不快感に近く、基準などが初めに存在するものではない。

関連語として「ちかうもてなさず」「愛敬おくる」「あいなし」などがあり、対義語の方向に、「をかし」「めでたし」などが存在している。

(21) 日一日下に居くらして、まるりたれば、夜のおとどに入らせ給ひにけり。長押の下に火ちかくとりよせて、さしつどひて扇をぞつく。「あなうれし。とくおはせ」など、見つけていへど、すさまじ、心地して、なにしにのほりつらんと覚ゆ。

(八二段 頭の中將の、すずるなる)

これは、作者が中宮のところへ参上したのにもかかわらず、中宮は「夜のおとど」に入ってしまった場面。仲間の女房たちが「とくおはせ」と遊びにさそっても「すさまじ」としか思われないのである。不快感に近いとは言うものの、当然あるべき中宮の存在がないことによる、期待感の破られた失望であることは言うまでもない。

「すさまじきもの」以外の例から、「すさまじ」は不快感に用いられることもあることがわかった。

4 おわりに

最後に、「すさまじ」の関連語についてまとめると、次のようになる。
わびし・あいなし・にくし・わりなし・いとほし・より所なし・

はらだたい・愛敬おくる

これを「にくし」の関連語と比べてみよう。

わろし・見苦し・愛敬なし・なめし・そしる・あやし・まどふ・愛敬おくる・心苦し・あぢきなし・腹立たし・聞きにくし・心あし・すさまじ・わりなし・むつかし・ゆゆし・かたはらいたし・まがまがし・さかしがる・うたて・いみじ・心もとなし・なめ・汚し・つらし

傍点を付した語は重なりあうものである。「にくし」との関連は、これから判断すると、相当あるように思われる。ただし、関連語の多さと言えば、「にくし」が圧倒的である。これは「すさまじ」の方が「にくし」よりも対象を制限する、言わば個性の強い、批評語としての性格があることによるのであろう。

「すさまじ」の本質は、「かならず来べき」「今年はかならず」「かならずさるべき」などとあったごとく、当然そうなるはずという前提・基準があることであり、「にくし」にはそれがなく感情語に近いものと言える。「すさまじきのみならず、いとにくくわりなし」とあったことがその証拠である。

ただし「すさまじ」が、会話文を中心として「にくし」と同様な不快感を示すことももちろんあったわけである。

筆者はこれまで、清少納言は、まず対象を「をかし」(快)かそうでないか(不快)でとらえ、次に他の美的理念語や嫌悪表現語に分類するという構造をもっていたと考えてきたが、本稿の検討により、対

象をまず「をかし」と「にくし」でとらえ、そこから「めでたし」などの美の方向、「すさまじ」などの不快の方向に位置づけていったものと推定するに至った。

「をかし——にくし」などの下位分類に、「めでたし——すさまじ」などの批評語が位置すると考えるのである。

注(1) 美的理念語とは、美を評価する語のことを言う。美的語詞などという呼び方もある。

(2) 枕草子の「をかし」と「あはれなり」(「佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集」所収)。

枕草子の美的理念語(「中田祝夫博士功績記念国語学論集」所収)。

(3) 「小松英雄博士退官記念国語学論集」所収。

(4) 美的理念語に対するものとして、現段階で、仮に嫌悪表現語としておく。

(5) 傍点筆者。以下同じ。

追記——本稿は平成二年度国内研修員として、筑波大学に留学した時に研究したもの一つである。